

## 前カトリク期の異邦人基督教に於ける二潮流

辻 村 正 吾

一

原始基督教の中に發展を認め、之を歴史的に理解せんとした事は、明かにパウロ及びチュービンゲン學派の功績であつた。併し彼等が使徒パウロの生涯を通じての彼と猶太人基督教(Judenchristentum)との對立を基本として、猶太人基督教の代表は使徒ペテロであり、異邦人基督教(Heidenchristentum)の代表はパウロであつて、兩者の妥協せるものが即ちカトリク教會の成立であるとなした、明かにヘーゲル流の辯證法の影響を示す説は、餘りに單純粗雑であつて、原始基督教の發展はそれよりも遙かに複雑なるものである事は今日明かとなつた。ペテロの基督教即猶太人基督教と云ふのが誤りであるのと同様に、パウロの基督教即異邦人基督教と云ふのも誤りであつて、今日我々がパウロの書簡から理解する如きパウロ主義の上に大異邦人教會は建てられたのではない。パウロ以前に、パウロと並んで、又パウロ以後に、ローマやアレクサンドリア其他各處にパウロ主義に反對する諸勢力が盛であつたのであつて、ペテロもその一人であり、新約聖書中の使徒行傳やパウロ書簡から窺ひ知らるゝペテロは猶太人基督教の側よりも、むしろ

る異邦人或はヘレニスト基督教の側に屬すべきである、と云ふ事が認められる様になつた。<sup>①</sup>果して然らばカトリク主義の發生は、異邦人教會のパウロ主義よりの墮落であると云ふのは當らない。一般に異邦人教會は猶太教及び猶太人基督教と分裂する點に於てはパウロ主義と一致したが、併しパウロ主義の積極的方面は初めから理解して居なかつたものが多かつたのである。この非パウロ型の異邦人基督教は、すでにパウロ等の活動せる使徒時代から存在して居た事は確かであるが、それが今日比較的明かに見られ得るのは、パウロ等の死後の所謂使徒時代(nachapostolische Zeit紀元七〇年頃から以後の數十年)である。この時代に於ては、七〇年にエルサレムが滅亡してより猶太人基督教は衰亡に向つて居り、基督教の將來は異邦人基督教にかゝれる事明かになり、その異邦人基督教の中にはカトリク主義への萌芽が發生しつゝあつたのである。この時代の非パウロ型の基督教を示すと考へられる文書はいくつかあるが、それらの中で特に重要と思はれる第一クレメンヌ書の示す基督教に就て次に検討し、その由來する所を考へて見度いと思ふ。

① Schubert, Grundzüge der Kirchengeschichte 1928. SS. 28-35.

Jackson—Lake, The Beginnings of Christianity Vol I. 1920. pp. 308-312.

McGiffert, A History of Christianity in the Apostolic Age 1916. p. 589.

山谷省吾、パウロの神學三四五頁。

二

この第一クレメンヌ書はその冒頭にローマの教會よりコリントの教會に送ると云ふ意味の挨拶が書かれて居るのみであつて筆者の名前はないが、それがローマの長老クレメンヌ(Clemens)の筆に成る事は、すでに殆ど同時代の「ヘルマスの牧者」が認めて居り、古い傳承の一致する所であつて、疑ふ理由は殆どない所である。而てクレメンヌがローマ教會の意見を代表して書いた事は明かであるから、この書は第一世紀末に於ける異邦人教會の雄たるローマ教會の宗教状態を知り、併せて一般異邦人教會の傾向を知る上に極めて貴重なる資料を提供する。又この書がドミチアン帝の晩年恐らく九五年前後に書かれたものである事は、多くの外證及び内證から確められる所であつて、學者間の定説と云つて差支ないであらう。<sup>①</sup>

この書簡の書かれし動機に就ては具體的に明かに云つてはないけれども、文中から察するに、コリント教會に於て若年層の者達が選ばれたる監督達や執事達の政治に反對して、明かなる非難の材料なきに拘らず彼等からその職を奪はんとして、老年層との間に紛争を惹起した。ローマ教會は基督教會の統一性と云ふ意識からこの紛争に忠告する義務を感じて、この書簡を書くに至りしものらしい。それで先づ紛争を起した者達に、その動機が嫉妬(φθος)と羨望(αφθυσ)に由来するとして警告した後、長々と説教體で雄辯に色々な例を引きつゝ種々なる問題に就て述べ、最後に禮拜式的な祈り文句で結んで居る。

さて我々がパウロ書簡等から知り得る限りに於ては、初代の諸教會にはその靈的指導者として使徒(ἀποστόλοι)豫言者(προφήται)教師(καθηγηταί)等があり、<sup>②</sup> 彼等は神よりの賜物(χαρίσματα)によりて之等の職に就いたのであつて、人間が

勝手にその職を奪ふ事は出来なかつた。之に對して監督(ἐπίσκοπος)執事(διακονος)⑥は事務財政等世俗的方面の仕事に分擔したもので選舉によりて職に就き、前者達の如く不可侵性を以て重んぜられたものではなかつたらしい。然るに恐らく豫言者等の靈感的賜物を有する者が少くなるに應じて、監督達執事達が靈的方面の仕事や禮拜的職務をも次第に掌る様になり、彼等は聖俗兩方面の權力を握る様になり、それと共に彼等の職は人間が勝手に奪ふ可からざるものとなつて行つたらしい。而て第一クレメンヌ書は正にこの不可侵性を強調する。即ち同書第四〇章―四四章によれば、禮拜の時と處と人物はすでに舊約聖書の中に神によりて規定されて居る、各職分には嚴重なる秩序があつて、之を犯す事は死罪に値する。同様に我々に與へられたる啓示にも一定の秩序がある、神は基督を遣し、基督は使徒達を遣した。而て使徒達はその傳道旅行に於て監督達執事達を置いた。イザヤ書第六〇章一七節に明かに「我彼等の監督を義しく執事を忠實に置かん」⑦と豫言されて居る如くである。又使徒達は來るべき紛争を豫想して、之等の職はその最初の所有者が死せる時は他の認められたる者によりて受嗣するべきことを定めた。故に全教團の承認によりて就職し、非難すべき所なくその職を行ひし監督達は、如何にしても免職されるべきではない。何となれば彼等の地位は使徒的權威によりて正統的のものであるから。彼等の地位は神の意志によりて平信徒の地位とは根本的に異る、と云ふ主張を述べて居る。

之は正に僧侶階級の神的權威を主張したものであつて、我々はこの書に於て後のカトリク教會法の萌芽を見ると云つて誤りでない。併し尙この理論は全く明白には言ひ表はされて居ない。と云ふのは一人の監督は他の監督によりそ

の職に任命さるべしと云ふ事は、尙明かに云はれて居ないからである。筆者は、使徒達の後には「他の著名なる人々が全教會の承認を以て」<sup>①</sup>監督を任命する、と云つて居るのみである。併し乍ら彼はこの傳統の連鎖が神より發せしものなることを強調して居り、疑もなくこの連鎖を全監督に押し擴めんとして居るのであるから、人々は「著名なる人々」を以て監督と解釋するに至りしは當然である。斯くて歴代監督職の使徒的傳承の教へを生じ、監督職を教團から獨立的のものたらしめる結果となり、嘗ては教團が監督を技術的職能として選んだが、今や監督がその後繼者を選び、教團は單にそれを承認するのみとなつたものと思はれる。

こゝに注目すべきは、彼が自説の根據として聖經即ち舊約聖書を専ら用ゐて居る事である。舊約聖書の宗教規定は自明の事としてその文字通りの意義は失ひ、基督教的秩序の類型として利用されて居る。舊約聖書に於て禮拜形式の諸關係は嚴重に規定されて居てそれを犯す事は死罪に當つたと云ふ事實から、彼は直ちに基督教に於ても同様でなければならぬとの結論を出して居る。而てこの證明法を彼は讀者にも自明の事として行つて居るのであつて、この事は當時すでに舊約聖書が猶太人の範圍を超えて廣く基督教徒の内的所有となつて居り、その命令規定は類型學的解釋によりて教會生活の規定として利用され得たことを示すと見ていゝであらう。<sup>②</sup>

更にこの書簡は到る所にギリシア譯舊約聖書(七十人譯)の言語の影響を強く受けて居るのみならず、各所にその長短の句を引用して居る。クレメンスの神學的論證は全く舊約聖書の上に立つて居り、之に對して基督の言葉は僅かに二箇所程(一三・二一、四六・八)權威的根據として引用されて居るにすぎない。舊約聖書は過去の人々を導いた如く、

現在に於て基督教徒を正しい道に導く、舊約聖書の歴史、そこに現はれる男女の運命は、我々に正しい生活態度に就て警誠と模範を提供する。<sup>⑨</sup>のみならず舊約聖書の記事の中には基督に對する類型的意義附け、隠されたる豫言を發見し得る、と云ふ。<sup>⑩</sup>こゝに我々は舊約聖書がローマ教會の基督教徒の間に有せる中心的地位を見ることが出来る。それは神的啓示の根底書であつて「選ばれたる民」を教へ、救ひへの道を示すべき書である。併しこゝに於てもイスラエルとは類型的名稱であつて、神が全世界の民から基督によりて選びし者即ち基督教徒を指す。<sup>⑪</sup>

更に神の命令の内容は先づ何よりも道德的規定である。それは律法として或は歴史的範例として我々に與へられて居る。神が天地萬物人類を創造して喜んだと云ふ創世記の記事までが、人間の道德的善行の模範として提示されて居る(第三章)。又神は無慈悲なる裁判官に非ず、悔改めし罪人を赦し、之に恵みを與へ、彼を再び眞理の道に導き返し給ふと教へる。併しその道とは先づ第一に専ら猶太教的な道德の教へを守る事であると云ふことが、舊約聖書からの多くの引例を以て説かれる。<sup>⑫</sup>この猶太教的道德への依存は極めて著しい此書の特徴であつて、我々は之がローマの猶太人會堂シナゴグで作成され或は朗讀され得たとすら考へ得る程であるし、又時に「神的グノシスの深さ」等と云はれて居ても、それは決してヘレニズムの密儀の神祕的な響きを有せず、神の命令の明かな知識とか、舊約聖書に於ける神の言葉の正しい解釋、と云ふ様な意味で云はれて居る。<sup>⑬</sup>

然らばこの書の宗教性に特に基督教的な部分はないかと云ふに、成程我々は到る處でイエス・クリストの名前に出會ふ。併し乍らその本質に於て基督は神的啓示の運搬者であり、上述の如き道德教の宣傳者であり、その完成者であ

る。神の命令は基督の命令であり、それを満たす所に基督教の本質がある。基督はかゝる道徳生活の模範であり、かかる愛から我々の爲に血を流した、と云ふ(二六章、四九―五〇章)。併しモーセ其他の神に選ばれし人々もかゝる愛を同じ様に實行したと述べられる(五三・五、四九・五一―六)。従て基督は彼等に對しその愛の行爲の高さに於て秀づる丈であつて、その内的本質に於ては異らない事になり、パウロの云ふ如き救主としての意義は失はれる如く見ゆるのである。

併し乍ら又基督の他の意義も考へられて居ないことはない。特に基督の血に就て度々云はれて居る。「それは我々の救ひ爲に流されて全世界に悔改めの恩寵をもたらした」「主の血に依て凡て信じ神を望む者に救ひは與へられる」と云ふ。又初代使徒宣教の中心點たりし基督の復活に就ても論及されて居る。之等の點に於て我々はパウロ思想の影響を明かに認め得る。併し乍ら之等は云はば單に冷たい事實として述べられて居るに過ぎず、パウロの如き内的生命から出た言葉ではないことも直ちに認められる所であつて、その眞の靈的意義は理解されて居ないのではないかと感ぜざるを得ない。

同様に又人の義とされるのは自己の智慧や能力、敬虔や業によるのではなく信仰による(三二・四)と殆どパウロと同じ様なことを述べて居るが、併しそれにすぐ續いて、信仰により神は原始から凡ての人を義として來た、と述べて居る所から見ても、クレメンスの云ふ所はパウロの形式は借りて居るが、内容を異にする事が認められる。彼にとりて信仰とは基督教徒の氣持を表はす總括的の言葉であつた事も確かであるが、併しそれよりもむしろ他の諸徳と同列

に並べられる基督教徒の徳の一つと解されて居る事が多い。その本質は舊約聖書のノアやアブラハム、ラハブやエセル等の例を以て絶對的なる神信賴と解されて居る。<sup>18)</sup> がそれ以上にパウロに於ける「イエス・クリストを信する信仰」の眞義は理解されて居ない。されば彼が救ひと善行への道を奨勵して「……我々の言葉によらず業によりて義とされる」とか「主の報酬は各人にその業に應じて與へられる……」等と云ふ時に、彼の眞意の現はれて居るのを見得る。<sup>19)</sup> 第三章の如きパウロのロマ書からの引用と見られる長き句もその中にあるが、その云ふ所はパウロの信仰とは全く正反對で、基督者の生活は未來の約束の賜物を與へられんが爲に、絶えず奮闘努力して善業を行ひ道徳に細かなる生活として述べられて居る。彼にありてはパウロと異り、業による義は信仰による義よりも優位にある。彼の宗教の基調は「我々は全力を盡して義の業を行はうではないか」にある。<sup>20)</sup>

① Pastor Hernae, Visiones II, 4.

Eusebius, H. E. III, 16, 及び IV, 23, 11. 下記のコリントのテモオニシウス等参照。

② Harnack, Einführung in die alte Kirchengeschichte 1929, S. 49 f.

③ Cf. Harnack, Die Chronologie der Altchristlichen Literatur I, SS. 251-255.

④ コリント前書一二・二八。ロマ書一二・六一九。

⑤ コリビ書一・一。

⑥ クレメンヌスは七十人譯によるイザヤ書六〇・一七の文句を少しく變更して引用してゐる。

⑦ 第一クレメンヌス書四四・三。

⑧ Cf. Lietzmann, Geschichte der Alten Kirche I, 1937 S. 204 f.



- ⑨ 第一クレメンヌス書七・五―七。九―一八。一九・一。四三。四五・二。五〇・三。五三・一―五。
- ⑩ 参照第一クレメンヌス書一二・七。一六等。
- ⑪ 第一クレメンヌス書二・九。二九・一―三。五〇・七等。
- ⑫ 例へば第一クレメンヌス書七・五―七。三五。四八・一。五一。五二等。
- 愛する若よ、如何にしてそれはなし得らるゝか？若し我々の心が信仰によりて神に固く結び付いて居り、神の喜び給う所を熱心に求め、神の汚れなき意志に適う所を行ひ、眞理の道に歩み、我々の前からあらゆる不正と非律法、貪慾、鬭争、好悪と詐欺、私語と悪評、高慢と大言、虚榮と不親切を斥けるならば、……(三五・五)。
- ⑬ 第一クレメンヌス書四〇・一。参照 Lietzmann, Geschichte d. Alt. Kirche I. S. 206. Harnack, Einführung. S. 114.
- ⑭ 第一クレメンヌス書七・四。一二・七。二一・六。
- ⑮ 第一クレメンヌス書二四。二六。四二・三等。
- ⑯ 第一クレメンヌス書一・二。三・四。五・六。六・二。九・四。一〇・七。一一・一。二六・一。三五・二。五五・六等。
- ⑰ 第一クレメンヌス書三〇・三。三四・三。
- ⑱ *Et daps tns ierxhos ihuos, eprzadidex epro ox uouo rns* (第一クレメンヌス書三三・八) Cf. Harnack, Einführung. S. 77.

## 三

上に述べし如き第一クレメンヌス書の基督教は、最早猶太教の儀式的律法を文字通り守らないと云ふ點に於ては猶太人基督教と對立しパウロの宗教と一致するが、併しその本質に於ては少しも新しい宗教でなく、依然として舊約聖書的宗教、文字の宗教、律法の宗教、道德宗教であつて、パウロの靈的信仰的宗教とは根本的に異なる。基督は道德教師

以外の意義を事實上有しない。パウロに於ては基督は彼を單に猶太律法の文字からのみならず、あらゆる意味に於ける肉体的なもの、律法制的のものから解放してくれた救主であつて、基督教徒の生活は全く新しい *Reign* の世界の、何物にも束縛されない自由なる生活であつた。そこでかゝる道徳的律法的宗教の傾向は、少數の例外を除いて、この後使徒時代の多くの文書に見られる當時の一般異邦人教會の傾向であつたと見える。新約聖書の中ではヤコブ書、ユダ書、ペテロ後書等、經外典ではこの第一クレメンス書の外に第二クレメンス書、ダイダケー (*Didache*) 等何れもかゝる宗教傾向の中から生れたものと考へられる。之等の書一々に就てこゝで述べる餘裕もない故、もう一つだけそのヤコブの名の故に新約聖書中に取入れられて居る「ヤコブ書」に就て簡單に見ようと思ふ。

この書の年代はその内證及び外證から云つてやはり第一世紀末若くは第二世紀初となす説が有力であり、その著者に就ては最も議論ある所であるが、恐らくユダヤ生れの一基督教信者が、イエスの兄弟にして後にエルサレム教會の指導者たりしヤコブの名に於て書いたものであり、又受信者は猶太人信者と云ふよりもむしろ基督教徒全體であつて、第一章一節の「散り居る十二の族」は象徴的に「眞のイスラエル」即ち全基督教徒の意に解すべきであらう。何れにせよ猶太の儀式的律法に對する著者の態度は一般世界教會の態度であつて、猶太律法が尙基督教者を拘束して居る如き思想の痕跡はなく、著者にも讀者にも之を守つて居る如き形跡は見られない。而も尙基督教は明かに律法的な立場から考へられて居る。成程それは「自由の律法」(ヤコブ書一・二五。二・一八、二二)と呼ばれて居るけれど、これに依つて律法的性質は少しも損はれず、それを守る事即ち隣人に對して愛と憐憫を行ふ事に依つて神より憐憫ある審判を受け

る事が出来るとする(二・一——三)。パウロにとりては基督者の生活の中心は、たとへ愛の律法にしても、律法を守ると云ふ點に存せず、彼の中にある基督の生命を生き働くと云ふ點にあつた。結果としての行爲には兩者に同様に見ゆる點があつたかも知れぬが、その原理は全く異なるものであつた。又イエスは信者の生活を愛の律法を守る生活として描いて居るが、彼はこの律法を常に父なる神の意志の表現と見て居り、從て隣人に對する愛と同様に神に對する愛を常に強調する。ヤコブ書には斯の如き神の父性を強調し、この神に對する愛を宗教の中心として見る思想はない。「孤兒と寡婦をその患難の時に見舞ひ、又自ら守りて世に汚されぬ」ことが「潔くして穢なき宗教」である(一・二七)。從て基督者の神に對する子としての關係、パウロの云ふ如く信者の中に生きて彼を神の子たらしむる基督自身、が彼の救ひの保證ではなくて、神の律法を守ることがその保證である。律法の業に依らず信仰に依りて義とされると云ふのは眞でない、その反對に人は業によりて義とされるので信仰のみによつては義とされない、と云ふ。而てパウロのロマ書或はヘブル書等に信仰の模範として示されるアブラハムやラハブは、その反對に行爲の例として引用される。之は明かにパウロの教へに對する意識的論争として見らるべきではないか。斯く見る時はたとへこの書がパウロ書簡の如く基督教の教義を解説せんとしたものではなく、基督教を信仰の結果たる行爲の方面より見たものであるとか、或は又自己の行爲の失敗をパウロの教へに隠れて辯護せんとする輩を誡めたるものであるとかしても、その信仰の根底にパウロと異なるものがあることは見逃し得ない所である。こゝにやはり我々は第一クレメンヌス書と同様な道徳的律法的の宗教を見るのである。而もその道徳はやはり全く猶太教的舊約聖書的道徳であつて、イエス・クリ

ストの名は僅かに二回(一・一及び二・一)全く形式的な云ひ方に現れるに過ぎず、それ故この書は基督教徒ではなくて猶太教徒を目的に書いたものであるとの假説すら唱える者がある程である。

① Cf. Harnack, *Chronologie* I. S. 485 f.

Moffatt, *Introduction to the Literature of the New Testament*. 1918. p. 456 f.

Peake, *A Critical Introduction to the New Testament*. 1926. p. 84 f.

之等の語點に就ての詳論は本稿の目的でない故に省略する。

② ヤコブ書二・一四—二六。參照ローマ書四・三。ヘブル書一・一十、三一。

③ Cf. Lietzmann, *Gesch. d. Alt. Kirche* I. S. 212 f.

McGiffert, *A Hist. of chr. in the Apost. Age*. p. 446 f.

Moffatt, *Introduction*. p. 465 f.

#### 四

そこで上述の第一クレメンズ書或はヤコブ書に見る如き律法主義的道德主義的宗教の源は何處から來たか？勿論上述で明かなる如くそれは舊約聖書、猶太教から來て居る。併し乍らそれは最早固有の猶太教ではなくて、律法を著しく精神化象徴化して考へる點に於てヘレニズム的後期猶太教(Spätyudentum)の影響を決定的に受けて居るのを見る。即ち、ヘレニズム時代になつて以來猶太教はギリシア的精神文化と接觸する様になると共に、一方に於ては古い偶像崇拜が次第に破壊されて衰へて行き、又一方に於ては猶太の一神教が新しい世界的宗教思潮に類似して居る所

あり、且猶太教の道徳がストア主義の根柢の上に建てられたる通俗哲學の道徳訓と多分に共通點ある事が次第に明かになつて來た。こゝに於て教養あるディアスポラ(Diaspora)の所謂ヘレニスト猶太人の間には今こそ彼等の宗教を以て異邦人を照らすべき時が來たとの考へを抱くに至り、こゝにアレクサンドリアを中心として舊約聖書のギリシア譯(七十人譯)が作られ、又ギリシヤ思想の多分に混入したるフィロの哲學、其の他各種の後期猶太教文學、殊に注目すべきは「神託」(Sibyllenes)「アリストエアの手紙」(Aristeas) 其他の所謂宣傳文學が生れた。②之等のヘレニスト猶太人の手によりて猶太教は云はば世界的宗教となつて、多くの改宗者(Proselyt)を獲得することが出來た。彼等にありては勿論本來の猶太人的特質は失はれず、強い民族意識、舊約聖書其他の宗教文學の所有、神殿税の獻納、エルサレムへの巡禮、會堂(Synagoge)に於ける安息日の嚴守、祭節殊に逾越節及び假廬節の祝、等にそれは見られたが、而も尙之等の「自由主義的」なるディアスポラのヘレニスト猶太教と、「正統的」なるパレスティナ猶太教との間には本質的にも云ひ得べき深い相違が出來た。ヘレニスト猶太人達は舊約聖書を譬喩的に解釋し、聖書の儀式的形式的宗教規定は尊敬されたが全く精神化されて象徴的の意味しか有せず、神殿に於ける犠牲禮拜の代りにシナゴグに於て聖書朗讀と説教と祈禱の禮拜を行つた。彼等の中には割禮すらも行はない者があつた。プラトン、ストア、さてはエピキュール思想すら彼等の信仰の中に入り込んだ。特にアレクサンドリアに於て著しかつた。ヤーウエー(Culture)は *cosmos* (至上神)と同視され、その天使と共に麗衛に多く利用された。猶太教の殉教者達はストア的從容の代表者とされ、割禮や改宗者の洗禮の場合にはサクラメント的要素すら時折忍び込んで居た。③猶太教の特質としては、神學的

根柢としての一神教主義、偶像なき精神的神の禮拜、倫理生活の法律性、即ち一般道德律を守るか否かによりて裁かれる最後審判の信仰、等が考へられる位であつて、猶太教は極めて世界的宗教の性質を帯ぶるに至り、周囲の異教的なる深い思想と異なる點は僅かに啓示の信仰にある位のものであつた。<sup>④</sup>第一クレメンス書やヤコブ書などの宗教は明かにかゝるヘレニズム的猶太教の影響の下にあることを見る。

而もこの後期猶太教の道德律への信仰は當時のヘレニズム世界の道德的理想主義と極めて類似したものであつた。共和末期のローマ世界の一般道德状態が如何に低いものであつたにせよ、紀元第一、二世紀頃に於て力強い倫理的運動が基督教や猶太教とは獨立に起りつゝあつた。大都市の惡徳に對する反動が人民の心に盛になり、純潔正直なる生活の重要性が強調され、而てそれは道德律の承認となり、その道德律の命ずる所に従ふ生活の必要が益々感ぜられて居た。かゝる運動を最も良く代表し、之を哲學的に表現したのが、第一、二世紀の頃にめざましく復興しつゝあつたストア主義であつた。<sup>⑤</sup>かゝるストア主義的な道德思想が猶太教の道德と結び付いて、第一クレメンス書やヤコブ書等の道德主義的基督教に大きな影響を與へて居ることも明かであつて、例へば第一クレメンス書に於て我々は、セネカ、エピクテート、プルターク等の特色を思はせる多くの哲學的用語や思想群を見出し得るのである。<sup>⑥</sup>

そこで若しかくの如き道德的理想主義の影響を受けた異教の人々、或はそれから猶太教に改宗した *Proselyt* (改宗者) と呼ばれる人々、或は殊にヘレニスト猶太人などが基督教を受けた場合に、之を上述の如き理想的猶太教の繼續と見、完成と見て、イエスをかゝる道德宗教の最高の教師と見るに至りしことは極めて當然と考へられる。第一クレ

メンス書を書いたローマ教會が若しかゝる人々によりて建てられたとするならば、ローマ教會の根本信仰がその特質を傳へて居り、パウロ主義は單に外側から附加されたものにすぎず、その本質が理解され得なかつたのは當然であつたと思はれる。

新約聖書の使徒行傳第六章に基督死後のエルサレム基督教團に於て七人の執事が選ばれた記事がある。彼等はその名前から見て皆ヘレニストであつて、その中には猶太人ならざるアンテオケの改宗者ニコラオ(Nicolaos)もあつたと記されて居る(行傳六・五)所から見ると、彼等の基督教は上述の如きヘレニスト的道德主義的のものであつたことは略想像されるのである。さればこそ彼等の猶太教の儀式的律法に對する自由なる態度は、より頑固なる猶太人達の反感を買ひ、ステパノ(Stephanos)の殉教となつた大迫害がエルサレムの基督教會に對して起り(行傳七―八章)、彼等は散らされ、その散らされた者達によつてシリアのアンテオケに最初の異邦人基督教會が起つた(行傳一・一九―二六)。然るにこの大迫害の時にも使徒達は散らされずにエルサレムに残つた(行傳八・一)と云ふのであるから、散らされた者は主として反律法的なヘレニスト達であつて、パレスティナ本國の猶太人基督教者(即ちヘブライスト)達は比較的安全であつたと見られる。故に散らされしヘレニスト達に依て起されしアンテオケの教會の根本は、やはりヘレニスト流の道德主義的基督教であつたと見て差支ないであらう<sup>⑦</sup>。而てこのアンテオケの教會が今後所謂異邦世界傳道の出發點となつたのであつて、やがてはパウロも此處を出發點として傳道に出て居る(行傳一三・一―三)。さればローマに於ける基督教會も、勿論パウロ傳道の始まる以前に、このアンテオケ教會から遣されたヘレニスト猶太人

達に依て起されたのではないかと想像されるのである。<sup>⑤</sup>ローマ・カトリク教會の傳承は教會建設者をペテロとして居るが、そのペテロはやはりアンテオケから來たことになつて居る。<sup>⑥</sup>果してペテロであつたか否かは頗る問題であるが、少くともペテロと同傾向のヘレニストの基督者達であつて、やがて後にはペテロも來た事は略確實であらう。<sup>⑦</sup>果して然らばローマ教會の主流もアンテオケと同様ヘレニスト流の道德主義であつて、恐らくその教會はローマのヘレニスト猶太人のシナゴグから發生したものであらう。その證據の一つとも見らるべきは、第一クレメンス書の數箇所に神に對する讚美祈禱様の長い文句があり、最後近くにその最も長いものがあるが、<sup>⑧</sup>之等はその三聖唱和、宇宙の秩序と神の恩恵に對する讚歌、又最後の讚美祈禱、執成の祈り等に於て、基督教的に變更を加へられて居る所もあるが、その根柢に於て猶太教的のものであり、それにギリシア的宇宙論的思想やギリシア的密儀禮拜の影響の加はりしものであることは殆ど疑ひがない所であつて、疑ひもなく之はヘレニストシナゴグの禮拜式文句からローマ教會の禮拜式に取入れられたものであらう。<sup>⑨</sup>斯く見る時に我々はローマ教會の起りを理解し、それと共にその宗教傾向の源を理解することが出来るのであつて、而てそれは正に第一クレメンス書の示す宗教傾向なのである。

それはパウロ主義から生れ、パウロ的熱情が枯渴して成つた律法と道德と形式の宗教として考へらるべきではない。それはギリシア的なシナゴグから直接に成長したものであつて、ヘレニスト猶太人或は改宗者達の把握した基督教である。それは初めから舊約聖書の儀式的律法に對しては自由であつた。併し彼等にとり基督教は神の命ずる道德の宗教であつた。その道德は舊約聖書に書き記され、又最後最大の豫言者イエスによりて啓示されたものであつた。



基督教徒とはこの道徳命令を守る者である。而てたとへ意に反して絶えずその命令を満たすことが不可能であつても、正直に罪を告白し、眞實に改善の意志があれば憐憫の神の赦しを得ることが出来る。併し根本原則は動かない、行爲が凡てを決定する、と云ふのである。

- ① 参照イザヤ書四九・一―六。六〇・一―六。所謂第二イザヤ以來猶太人の希望である。
- ② Lietzmann, *Gesch. d. Alt. Kirche* I. SS. 74-101.
- ③ Schürer, *The Jewish People in the time of Jesus Christ (English Translation)* Div. II. Vol. III. p. 270 f.
- ④ Schneider, *Einführung in die neutestamentliche Zeitgeschichte* 1934. S. 175.
- Schürer, *The Jewish People*. Div. II. Vol. II. p. 281 f.
- Jackson-Lake, *The Beginnings* I. pp. 36-52.
- Meyer, *Ursprung und Anfänge des Christentums* III. 1923. S. 271 f.
- ⑤ Lietzmann, *Gesch. d. Alt. Kirche* I. S. 75.
- McGiffert, *A Hist. of Chr. in the Apost. Age* p. 444.
- Jackson-Lake, *The Beginnings* I. p. 46.
- ⑥ Hatch, *The Influence of Greek Ideas and Usages upon the Christian Church* p. 140 f.
- McGiffert, *A Hist. of Chr.* p. 448 f.
- Meyer, *Ursprung*. III. S. 319 f.
- Jackson-Lake, *The Beginnings* I. p. 260 f.
- ⑦ Cf. Harnack, *Einführung*. S. 84 f.

例へば *αδελφοί*, *στυγάς*, *πνεύμα εὐαγγελίου* 等の概念が屢々用ゐられて居ること、其他幾多の例をハルナックは擧げて居る。

- ① Lietzmann, *Gesch.* I. SS. 63-65.  
 Jackson-Loke, *The Beginnings* I. pp. 307-310.  
 山谷省吾、パウロの神學、三四〇—三四二頁。
- ② Lietzmann, *Gesch.* I. S. 109.
- ③ Petrus apostolus, cum primum Antiochenam ecclesiam fundasset, Roman mittitur, ibique Evangelium praedicans  
 XXXV annis eiusdem urbis episcopus perseverat. (Jerome, *Eusebius Chronicon*.)
- ④ この點マイヤールの如きがローマ教會の起りを「マテロとヤコブの立場にある」猶太人基督教の人々に歸して居るのは、尙チユー  
 コンタン一派と同様にマテロをも「プロライストの立場に置くものであつて、我々の賛成し難い所である。」(cf. Meyer, *Urspr-  
 ung*, III. S. 464) 併しこの點に立入ることは省略する。
- ⑤ 第一クルメンヌ書三三・三一六。三四・六一八。三八・三一四。五九・二一六一・三。
- ⑥ Lietzmann, *Gesch.* I. S. 209.
- ⑦ Harnack, *Einführung*, SS. 112, 113, 119.

## 五

然るにパウロの仕事が尙根を下し實を結んで居た群から出たと思はれる文書に來ると全く異つた空氣を我々は感ずる。こゝでも勿論エピゴローネントゥムの感は免れ得ない。パウロの如く強い創造的人格と比すれば、後に出た者がどうしても弱く感ぜられるのは止むを得ない所であらう。併し上述の道德主義の基督教と比すれば遙かに生命力に溢れたものあるを感ずる。かゝる文書として我々は新約聖書中に取入れられて居る「ヘブル人への書」及び「ペテロ前書」と呼

ばれて居るもの等を擧げることが出来る。こゝでは唯前者に就て一瞥し度いと思ふ。

ヘブル書は上述の第一クレメンス書の筆者が知つて居たことは間違ひない様であるから、紀元九五年頃より以前に書かれたことは確かとされる。之がパウロの作でないことは、その文體や思想からも明かであると云はれるし、又内容も明かに後使徒時代のものたることを示す<sup>②</sup>。又外的に云つても、ローマで早く知られて居たに拘らずパウロの作と認められて居た形跡なく、マルキオンのカノンにもムラトリ斷片にも入れられて居ない。パウロ作を唱え出したのは第二世紀末アレクサンドリアのクレメンスからで、以後東方で大體受容れられ、西方ではアウグスチヌスやジェロームが讓歩して東方説を受容れてから大體認められる様になつたものである。併し今日はパウロの作でなく後使徒時代のものであることは最早疑ひ得ない所である。

ヘブル書の有する大テーマは基督であつて、之が初めから終りまでを貫いて居る。而もそれが問題とする所は福音書に傳へらるゝ如きイエスの姿と云ふよりも、むしろパウロに依て宣傳せられたる神の子としての基督である。彼は萬物の先にあり、世とそこの中にある凡ての物を創造し、人となり、我々の爲に十字架に死し、神の右に擧げられ、やがて再び彼を待望む者に現はれるであらう、と云ふ(ヘブル書一・二、三。九・二八。一〇・二五)。併し單にパウロの模倣ではなくて、著者はパウロの思想精神を理解し、之を更に自己獨特の精神を以て發展せしめ豊富にして居る。パウロがピリピ書(一・六)やコロサイ書(一・一五)等で簡單に云つて居る先在の基督に就ても、之をヘレニズム的ユダヤ的神學から來たと思はるゝ哲學的用語を以て表現し、彼は神の榮光の輝 (*theophany, the glory*) であり、本

質の像 (*Yagazhip* *the* *Incarnation*)であると云つて(ヘブル書一・三)將來の神學發展に重大なる影響を残した。而てこの御子は凡ての天使よりも又モーセよりも優れたる者であるから、その言はモーセ律法以上の力を有する(一・四。二・一—四。三・一—五)。この神の子の人化に就ては、後のヨハネ傳に見る如く、パウロの思想を更に擴けてその宇宙論的意義を強調し、神は彼を「世に入れ」彼は「世に來た」と云ふ(一・六。一〇・五)。基督は我々凡てと同じ血肉を具へ我々の兄弟となり、人間的弱さを感じ、我々と同様に試みられた。故に彼は我々に同情を有ち、誘惑の危険に於て我々の助けとなり得る(二・一一—一八。四・一五)。而てパウロの云ふ死に至るまで神に従順なりし(ピリピ二・八)救主の思想を福音書のゲッセマネの苦闘に見るイエスの姿を以て説明する(五・七—九)。

更にこのパウロの中心思想たるイエスの受難、イエスの死による人類の救ひの意義に就ては、ヘブル書は獨特の説明を與へて、それが本書の最重要テーマとなる(七—一〇章)。即ち、舊約聖書に於て人民の罪のために犠牲の獻物をなす祭司職、殊に大祭司メルキゼデクを類型として、基督はメルキゼデクにも比すべき天に於ける大祭司である、而も大祭司は年毎に一度犠牲の血を至聖所に獻けて人民の罪の贖ひをなす必要があつたが、基督は我等の罪の爲に自身を犠牲として神の前に獻けて永遠の贖罪をしてくれたのであつて、我等は最早如何なる獻物をも必要とせず憚らずして神の前に出ることが出来る、と云ふ。之即ちパウロの云ふ人の救はるゝは基督を信する信仰によるのであつて如何なる律法的行爲をも必要とせず、と云ふ信仰主義と全く一致するものであつて、云はば祭司無用論、ルーテルの云ふ各人祭司主義である。舊約聖書を類型的根據として論じて居る點は一見第一クレメンヌ書などと似て居る様である。

が、ヘブル書の根本思想はパウロを正解せるものであつて、道德主義祭司主義の第一クレメンヌス書やヤコブ書等とは遙かに異なることを見る。

又ヘブル書はこの根本問題に附加して、更に信者の生活に就て色々反省を加へ、當時の必要に應じたと思ゆる種々なる訓誡や勵ましを與へて居る(一〇・一九—二三・一七。六章等)。その中には第一クレメンヌス書やヤコブ書等と類似せる訓誡等もあつて、こゝに重點を置いて見る者にはヘブル書を之等の書と同じ宗教傾向の中に入れて居んとする者もある。<sup>⑤</sup>併し乍らヘブル書の精神はパウロと同じく、我等には斯の如き救ひが與へられて居る故に斯々すべし(一〇・一九—二五)と云ふのであつて、救はれんが爲に斯々すべしと云ふ道德主義とは根本的に異なるものであることを見なければならぬ。

とは云へ、そこには又どうしてもパウロ時代のプニツマ的な感激から遠去かつて反省が加はり、教團生活の經驗から決定された所のエピゴーネントゥムの色彩は蔽はれ得ない。絶對的のものを相對的にし、非合理的のものを合理的のものに翻譯せんとする誘惑が感ぜられる。例へば信者の罪と云ふ問題に對して反省し、我等もし眞理を知る知識を受けて後ことさらに罪を犯して止めざば罪の爲に最早犠牲なし、只滅亡を待つのみ(一〇・二六—三一。六・四—一六)と云ひ、その裏には人間的の弱さから殊更でなく犯した罪と云ふ事が事實上考へられて居り、こゝに我々は後の教會を支配した「赦さるべき罪」と「死に至る罪」の區別の萌芽を見ることが出来る。<sup>⑥</sup>斯くの如く眞正のパウロ主義から見るならばどうしても猶太教的道德主義の方へ一步後退の感は免れ得ない。このことはヘブル書と同様にパウロ的

色彩の濃いペテロ前書に就ても云ひ得ることである。<sup>①</sup>併し之等を前述の第一クレメンヌス書其他當時の一般的な道德主義的基督教に比するならば、遙かに生命力強くパウロ的色彩の濃いものであつて、このことは間もなくヨハネ文書が現はれてパウロ的思想の深い理解を示すまで、殆どパウロを正解した者のない様に見ゆる後使徒時代に於て、尙パウロの感化力が一部の者に保持されて居たことを示すものである。第一クレメンヌス書がパウロ思想の影響の下に發展せる一般異邦人教會の道德主義的基督教であるとするならば、ヘブル書は一般教會の道德主義的影響の下に發展せるパウロ的基督教であると云ひ得る。

① 比較第一クレメンヌス三六・一(ヘブル二・一七。三・一。四・一四以下)。第一クレメンヌス三六・二―五(ヘブル一・三―七。一三)。第一クレメンヌス九・三以下(ヘブル一・五―一〇)。第一クレメンヌス二・一(ヘブル一・三二)。第一クレメンヌス一七・一(ヘブル一・三七)。第一クレメンヌス一九・一(ヘブル二・一)。第一クレメンヌス二一・九(ヘブル四・一二)。第一クレメンヌス二七・一(ヘブル一〇・二三)。第一クレメンヌス二七・二(ヘブル六・一八)等。

Cf. Moffatt, Introduction. p. 430.

Lietzmann, Gesch. I. S. 222.

Harnack, Fñführung.

② 例へばヘブル書二・三を見よ。

③ Cf. Eusebius, H. E. VI, 14

④ 先在のキリスト其他の思想に於ては單にパウロの影響のみならず、すでにフィロ其他アレクサンドリア猶太教の影響が認められる。

Cf. Moffatt, Introduction. p. 427 f.

McGiffert, A Hist. of Chr. in the Apost. Age. p. 477 f.

Lietzmann, Gesch. I. S. 217.

③ 例へば McGiffert, A Hist. of Chr. in the Apost. Age. p. 473 f. Weizsäcker, The Apostolic Age (English Translation)

II. p. 159.

⑥ 参照ヨハネ第一書五・一六。

Cf. Lietzmann, Gesch. I. S. 221.

⑦ ヘテロ前書に就ては後使徒時代のものとするべきか否か色々問題がある故こゝで述べることは省略する。

## 六

此時期に屬する他の諸文書<sup>①</sup>に就ても猶見るべきであるが、最も代表的なるものを見て一應本稿の目的を達した故に、之を以て一先づ終らうと思ふ。以上述べた所から我々に明かになつたことは、所謂猶太人基督教が脱落して後、異邦人基督教の中には二つの流れがあり、それが色々の程度に於て混合しつゝあつたと云ふことである。一つは猶太教律法に束縛されないヘレニステンの基督教であり、一般異邦人の間に廣く擴がり、特にギリシア的シナゴグの改宗者達の間に擴がつた。彼等にとり福音は、一神教主義の根柢の上に建ち、イエスに依て宣傳され深められた道德の教へであつた。彼等は猶太教から舊約聖書のみならず、禮拜式と宗教習慣道德を廣く受け嗣ぎ、又猶太教のギリシア化された學問や宣傳文書を自己の目的に利用して成功した。之と並んで大使徒の信仰を受け嗣ぐパウロ的基督教があつ

た。そこには天地を包括し神性の深さを探らんとする神學、基督とその死を根柢とする救ひの教へ、又靈的に基督と結合する基督神祕、が常に新しく生きて居た。之等二つの流れは異つた源から出たものであつたが、日常生活の實際的必要から、後者にも猶太的根柢に立ち基督教的に深められた所の道德の教へが生じた。而てその中には前者の教へと本質的に類似するものがあつたのである。而てパウロ思想のオリジナルな力が次第に理解され難くなり、同時に教團の道德的教育の必要が強くなると共に、兩者の區別は漸次薄らいで行つた。ヨハネ文書以後パウロ的精神の深い理解者は最早見られなくなつたと云つてよい。而て道德主義的、主知主義的の傾向が益々一般的になつて行き、第二世紀の前半、尙教會がグノシス主義との烈しい争闘を経験する以前に於て、我々はすでに早期カトリク主義の宗教の出現を、例へばイグナチウス等に於て、見るのである。而てそれは猶太教からは律法的道德主義と禮拜式を、ヘレニズムからは道德的理想主義とサクラメント神學と様々な密儀を、又パウロ神學からは神と基督に關する思想、基督の血による救ひと聖靈による聖化の教へ等を取り入れたものであつたのである。<sup>②</sup>

① ヘブル書やペテロ前書程ではないが、猶バロ思想の傳統の中から生れたと思はれるものに、新約聖書中では所謂教會書簡、經外典では「バルナバの手紙」等がある。

② Cf. Lietzmann, *Geschichte d. Alt. Kirche* I, S. 233 f. Harnack, *Einführung in die Alte Kirchengesch.* S. 86.

(以上)